

# 予備合宿 76

小島正也

周囲の色彩が失なわれてしまった。もうどれだけ上って来たのだろう。時折リ対向車が異様とも言える色彩感を残して去って行く。そして後には再び白い霧の中に無気味なぐらいの静けさがあるだけである。その中を十数人のサイクリストが上って行く。群馬県志賀草津有料道路草津区間と書かれた料金所を過ぎてからまだその時間はたっていないはずである。ポッポッと来ていた雨足が早くなつたようだ。勇大であろう風景は一面の霧で覆われて白くぼやけて溶け込んでしまっている。「ついでないな」僕は舌打ちをして変速機デレインのレバーを引いた。

カチコという快よい手応えとともに、踏み足の軽くなるのを感じながら、急になつた勾配にこたえるべく、回転数をわずかに増した。予備合宿は二日目をむかえていた。僕がサイクリングの道に首をつっ込んでから初めてのツトリングでかくような連続勾配を走ろうとは夢にも思っていないが、たから、「これが坂か」という実感とともに、「なんでこんな所を走らなくちゃならぬのか」という疑問を抱かぬではいらねえい。おまけにサイドキャリアまでつけたキャンピング装備である。そんな考えが頭の中でペダルを踏む足のように、何ともクルクルと回っている。

道は終わることを知らないので、霧の中に  
に縋っている。しだいに雨足がはやくなる  
代りに、視界がわずがづつ良くなってきた  
ようである。木々の数が減って高度がだい  
ふ増したことがわかる。しだいにコーナ  
ーが増えてくねくねとよって行く。いつの間  
にか一人で走っている自分に気がつき、心  
と不安感と孤独感がよぎる。雨足がさらに  
強くなって来た。雨の中にロッジが見える。  
殺生ヶ原ロッジである。先頭を走っていた  
僕は、後からくるみんなを待ってロッジの  
中へ飛び込んだ。

殺生ヶ原の硫黄の臭いが鼻をつく。すべ  
に周囲に岩肌を見せている高山のワイコー  
イングロードと化して、よっている。山頂  
方向は未だ霧へといっより雲の中にかく

れている。時々風が霧を運び去って、視界  
がひらけて、下の方が見える。その変化が  
大きいので思わずハッとさせられる。

「よくここまでよって来たなあ。」と感心し  
てしまう。まだ頂上サミットに着けないのであるら  
うが。あとどれくらいなのだろうか。そうだ  
き、と次のコーナを回ると頂上サミットだ。もう  
すぐだ。と自己暗示をかけてがんばる。後  
で考えれば実には甘がしいことなのだが。  
そうすることで行く分が気が楽になる。で  
ももつとれくらいよって来たのがなあ。

ろ地ロッジはもうすぐ先だ。―その思い  
ながらも、空腹と疲労で足がいうことを聞  
いてくれない。もう目の前に見えるの  
だが、自転車を路側に倒して草津で買った  
パニにオシロワク。雨がかなり強く降って

いるが、無心にパコに甘じりつく。それか  
らる池ロッジへ飛び込んだ。ロッジ内で濡  
れた木履を乾かす。殺生ヶ原ロッジではス  
トープをつけてく木だがここではまるてそ  
の長口ない。もう日がく木そうた。

山田峠を下ると再び上る道を悟性もなく  
なつた足で上っている。ボトルを忘れて  
来たことに長がつくが、戻る気力はもうみ  
じんもなかつた。

法峠 標高二一七二mの文字が、感動的  
だつた。ついにやつた。長かつたアマツク  
てはあつたが、ついにやつたのだ。日が暮  
れがかった峠の上で全員が雨の中、茫然と  
してしばしいたようだった。しかしあまり  
の人ひとりもしていらぬ。雨の中、暮れ

さつてしまふと、下りかたに恐しいおぐ  
しい僕にだつてあがるのだ。

その日の夜も九時になると、どうやら飯の  
仕度も整つたようである。志賀高原は木戸  
池キャンプ場のボコガローの中には、全員  
が入つて飯が、冷え込む外とは対照的に  
熱気がこもつている。全員の顔には疲の色  
が見える。食事が終り、SUNTORRYカ御  
飯にとつて変あるころには、会話がはずん  
てなごやかな雰囲気は部屋に満ちている。  
思つてみれば、何と止めようと思つたこと  
か。しかし今、僕を満ちしているこの味  
い宿舎は何なのだろう。この満足感はいつ  
たの何なのか。古人が「山がそこにあるが

ら登る」と言。長身持ちが、心とわがった  
 ような気がした。何故に自転車に乗るのが。  
 それをこの長身持ちが、今僕の体に乗らしてい  
 るこの満足感が、覚えていられるよ。長身がす  
 る。「もう一生、サドルを降りることは  
 出来ないな。しふとこんな言葉が頭に浮かん  
 だ。まだバニガローの中には会話が流れて  
 夜のふけるのを知らない。僕は水割の入っ  
 たコップを傾けて、金色の液体を喉に流し  
 込んだ。

次の日は、我々の苦勞に答えるかのように、  
 晴れて、良い天候となった。我々は長野まで  
 下って、無事に子孫台宿を終えるこ  
 とが出来た。



期日 1976年7月14日~17日

XCD 後半組

満口 宝谷 鈴木 栗原  
 大塚 古木 小野 三浦

前半組 (在中野井天)

園田 西尾 齋部 佐藤

初井 堀 (長野原川合流)

written by 小島 正也